

第 3 回学会奨励賞審査結果について

日本文化政策学会では、2024 年 1 月 1 日より第 3 回の学会奨励賞のための応募受付を開始し、受理した論文および著書について審査を行いました。以下に、その結果をお知らせいたします。

○審査結果

[論文の部]

該当作なし

[著書の部]

小林 瑠音『英国のコミュニティ・アートとアーツカウンシル タンポポとバラの攻防』（水曜社、2023年）

○審査過程の概要

今回は、「著書の部」として 1 作を審査いたしました。5 名の審査委員は、各候補作について、学会奨励賞審査委員会規則を踏まえた 8 項目につき、5 段階の評価を行うとともに、300 字程度の講評を提出しました。その結果は審査委員長が取りまとめを行い、それを審査委員全員で確認し、協議のうえで受賞作を決定しました。なお、8 つの審査項目は下記の通りです。

- A. 日本文化政策学会の目的にあった研究であるかどうか。
 - a. 広い意味での文化に関わる社会事象を焦点に当てている。
 - b. 実際の政策、政策のプロセス、政策上の判断を導く規範など、政策に視点を置いている。
- B. 今後、研究者として発展可能性があるかどうか。
 - a. 研究目的に相応しい研究方法を採り、的確に遂行している。
 - b. 学術的著作として十分な体裁を整えており、論理の展開も明確である。
- C. 研究内容に独創性または新規性があるかどうか。
 - a. 先行研究にない新しい理論や概念、モデルの構築、もしくは新しい観点や方法論の提示に成功している。
 - b. 学術的意義の高い、新規の事実・資料の発見や、研究領域の開拓を行っている。
- D. 研究成果が文化政策の発展に寄与するかどうか。
 - a. 先行研究を十分に踏まえたものであり、文化政策研究の潮流の中に位置づけられている。
 - b. 豊富な根拠資料に基づいており、資料としての観点から見て利用価値が高い。

○受賞作についての詳細

[受賞作]

小林 瑠音『英国のコミュニティ・アートとアーツカウンシル タンポポとバラの攻防』（水曜社、2023年）

[講評]

本作は、英国のコミュニティ・アート運動をアーツカウンシルとそれを取り巻く文化政策の視点から分析した労作である。先行研究が少ない中、膨大な資料と豊富な資料と関係者へのインタビューを通じて、コミュニティ・アート運動の歴史を詳細に描き、文化支援をめぐる論争に新たな視座を提示している。特に、アーツカウンシルとの緊張関係を取り扱った第Ⅱ部はスリリングであり、「アームズレングスのジレンマ」の分析は興味深く評価された。一方、第Ⅰ部では理論的枠組みが不明確な点やインタビューと文献の参照を明確に区別していない点に関しては改善が望まれる。

全体的に、英国のコミュニティ・アートとアーツカウンシルの関係を深く考察した意義ある研究であり、アームズレングスのジレンマに関する考察は、日本の文化政策研究にも貢献するものである。また、コミュニティ・アートと1970年代の「新しい社会運動」との関連性や、文化政策上の課題についても重要な示唆を与えており、著者の将来性が期待される。

○審査委員 A

堅実な学術論文として評価する。文献調査、先行研究への目配りも堅実であり、誠実な論考である。研究者としての将来性も期待できる。欧米の文化政策に関する研究は、第一次の諸先達の研究群に比較して、その後の変化や新事実が丁寧に把握、調査されていることに価値がある。そのあたりの目配りがなお欲しいと思う。その点では、アームズレングスのジレンマに触れた箇所は面白く、また今日的に価値ある記述である。外国文化政策研究は、ややもすると細かい報告となり、レポートに埋没しがちである。あえて欲を言えば、日本の公共文化政策やその研究に、この研究がどのような貢献をなしうるのか、という比較分析的な課題意識が欲しいと思った。

○審査委員 B

冒頭のコミュニティ概念の検討から、英国のコミュニティ・アートやアーツカウンシルの展開の説明に至るまで、些か冗長ではないかと感じられるほどの詳細さであった。しかし、英国のコミュニティ・アートとアーツカウンシルの実態を理解できるという点で本書は有益だったし、「タンポポ」と「バラ」の対比から、文化政策研究上の課題について考えさせられることも多かった。その一方で、より研究上のテーマを明確にし、理論的なフレームを際立たせれば、もっと情報を整理することができたのではないかと感じる。たとえばコミュニティ・アート運動、ケインズ、ロイ・ショウなどの主張から抽出できるロジックを整理することで、本研究から得られる知見を、より普遍的なものに昇華させることができたかもしれない。あるいは、コミュニティ・アートと1970年代の「新しい社会運動」との同型性に注目して、社会運動論の観点から事例を分析することもできたかもしれない。こうした理論的な面での物足りなさゆえに、本書の論調はジャーナリスティックな傾向が強すぎるようにも思われた。

○審査委員 C

日本の文化政策の研究において比較的多く参照されるイギリスの事例の中で、先行研究が多くはないコミュニティー・アートの分野で積極的に資料を掘り起こし、展開していった野心作と評価できる。日本においてイギリスのアーツカウンシルについての研究は相当にあるように思うが、コミュニティー・アートについてはあまり進展しているとはいえ、誤解もある中で、その定義、理論、歴史的変遷を丹念に調べ、アーツ・カウンシルとの関わりの変化を明らかにしたことは評価できると考える。またアームズレングスのジレンマについても非常に興味深い内容で面白く読ませていただいた。また諸外国との関わりの中でイギリスのコミュニティー・アートが発展してきたことを明らかにした点も重要な功績と考える。

○審査委員D

本書は英国のコミュニティー・アート運動を、アーツカウンシルとそれを取り巻く文化政策の視点から位置づけた労作である。先行研究の少ない中、関連資料の収集、当時を知る人たちへのインタビューなど、多くの独自資料からコミュニティー・アート運動の歴史を描き出している。また、文化支援をめぐる論争に目を向けることで、現代のソーシャル・エンゲイジド・アートやアートプロジェクトに通じる問題にも新たな視座を提供している。ただ、第Ⅰ部の4つの章は読んでいて、何のために読んでいるのかわからなくなることが度々あった。これは第Ⅰ部を通底するストーリー、言いかえれば、記述を行うための理論的枠組み（あるいは分析的視点）が欠如しているからだと思われる。一方、第Ⅱ部はコミュニティー・アートとアーツカウンシルの緊張関係というストーリーが明確であり、全体を通してスリリングで引き込まれた。特に「半独立機関としての本音：アームズレングスのジレンマ」（pp. 310-312）の分析は興味深く、このあたりの記述が深まっていくとよりよくなると感じた。また、細かい点だが、著者自身が行ったインタビューに関しては、文献の参照・引用とは区別して記述してほしい。とはいえ、非常に意義のある研究である。ぜひ成果を国際ジャーナル等にも積極的に発表していただきたい。

○審査委員E

本書は、英国コミュニティー・アートに関して胎動・発展から衰退までを概念的定義・歴史的変遷・社会的文脈・政策的背景等の視点で考察し、丹念に分析したものである。さらにコミュニティアートとアーツカウンシルの関係性の変化を鋭く指摘するとともに、コミュニティアートがアーツカウンシルの在り方に与えた影響を明らかにした点は、大きな成果として高く評価する。これまで英国のアーツカウンシルを題材にした多くの先行研究の中では、「アームズ・レングスの原則」の観点から適切性を確保していると言われていたが、「7章4. 半独立機関としての本音：アームズ・レングスのジレンマ」の論考は非常に重要で興味深いものであり、日本のアーツカウンシル研究に新たな知見を提示している。

審査委員長 関鎮京
審査副委員長 中村美亜
審査委員 井上敏
友岡邦之
中川幾郎

以上